

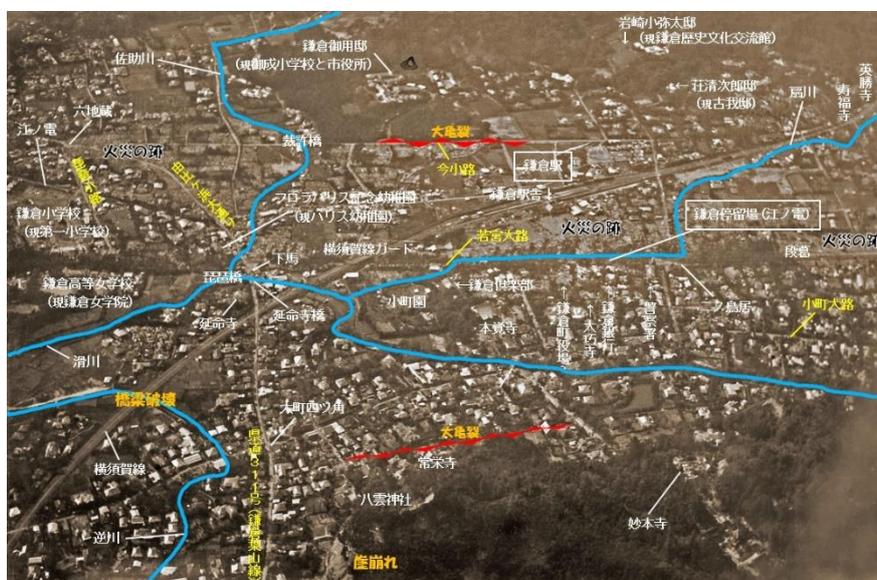
鎌倉関係航空写真①～⑥解説—『鎌倉震災誌』（鎌倉町役場、昭和 5 年）を参照して解説

・文中の「海嘯」（津波）は原文通りとした

撮影：大正 12（1923）年 9 月 9 日 横須賀海軍航空隊 F-5 式 7 号飛行艇（防衛研究所 戦史研究センター蔵）

①若宮大路 横須賀線 △御用邸倒壊

画面右上から左下にかけて横須賀線が弧を描いている。中央左右に若宮大路が通る。松並木が目印となる。鎌倉駅前（東口）広場から八幡宮方向に火災のあとが見える。鎌倉御用邸（現御成小学校）（△）の一部は倒壊した。



火災・停車場前（鎌倉駅東口前）

から発火した火災は南の烈風に煽られて、停車場前より瀬戸耕地一帯に延焼、更に雪ノ下区に侵入し、途中の旅館から発火した火と合した。一時は風位の関係で停車場も危険に瀕したが、幸いにして広場南隅の人力車自動車駐車を焼いたのみで駅本屋（駅舎）は事なきを得た。磯見旅館（現東京三菱UFJ銀行）の二階家が辛うじて倒壊を免れていたのみ、他は軒並み倒壊。

よって建物の下敷きとなって焼死した者が多かった。

- ・ 停車場前の火災は、鉄道陸橋付近より八幡宮社頭角正旅館（現在は駐車場）の付近まで、西側一帯の繁華な商業地区に延焼し、焦土と化した。
- ・ 小町園（現東急ストア駐車場）は、翌二日未明、倒壊当時発見されなかった残り火より発火し二戸を焼いた。
- ・ 焼失建物の主なるものは、駿河銀行支店（現もとまちユニオン）、関清蔵商店、鎌倉運輸倉庫、磯見旅館、小町園、松並木の老松数十本焼失。
- ・ 御用邸前の火災は、由比ヶ浜区から発火し、御成小路を越えて当区（小町）に侵入し、御用邸前の別荘地を焦土と化した。
- ・ また火災は、下馬橋付近より林材木店、電車線路（江ノ電）沿及び並木敷沿の数戸を焼き鎮火した。

で地盤は軟弱であり建物も耐震補強の設備を施していなかったため、校舎等は倒壊粉碎した。校庭は所々に大亀裂を生じ、一時は水を噴出した所もあった。この日は二学期始業式であり午前中で全児童は帰途についていたため、児童は無事であったのは不幸中の幸い。

- ・鎌倉女学校も全壊。
- ・フロラハリス記念幼稚園（現ハリス幼稚園）は園舎および附属建物は全壊。夏期休暇中であったため、園児等人命を損傷することのなかったのは不幸中の幸い。
- ・笹目の鎌倉産科婦人科病院（現セブンデーアドバンチスト鎌倉教会辺り）、島津侯、細川侯、松平子等の別荘は倒壊。
- ・笹目入口にあった鎌倉能楽堂は壊滅した。 ・笹目通は亀裂を生じた。
- ・由比ガ浜公会堂は倒壊を免れた。

橋・裁許橋は墜落。

③大町

画面左上から右下に横須賀線。滑川と逆川の合流点（画面左下）あたりは低地で人家もまばら。川の決壊、橋の崩落、裏山の崩落が目立つ。

倒壊・被害の最も激甚の箇所は、八雲神社前通以南県道に至る間、四つ角より安養院前に至る県道沿、延命寺付近、名越横町通等で、山の根に散在する建物は比較的軽少。

- ・八雲神社は社殿全壊。妙本寺は釈迦堂鐘楼客殿庫裡総門蛇苦止堂及び寺中大園坊等全壊、祖師堂経蔵は少破損した。常栄寺、別願寺、安養院、本興寺、延命寺、教恩寺は全壊。安国論寺、妙法寺、長勝寺、大宝寺、上行寺各本堂は倒壊は免れた。大町公会堂は1195番地（今の八雲神社社務所）にあって全壊した。



亀裂崩壊・県道名越踏切りより隧道まで約3丁（330m）の間亀裂を生じ、坂の両側は決壊し、隧道入口の崖崩落して、一時交通を遮断した。八雲神社より妙本寺総門に至る約三町の間および同門前十数間にわたり大亀裂を生じた。

- ・山林は八雲神社裏山、常栄寺裏山にわたり大崩壊。蛇苦止堂山、安養院裏山、絹張山、安国論寺山南

の山等も崩壊。

橋・逆川はいたるところ決壊。妙法寺橋。本興寺橋、中道橋、舊三枚橋、釈迦堂橋等どれも墜落。逆川橋のみ破壊を免れた。 ・逆川に架かる逗子鎌倉間橋梁が破壊された。

津波・材木座踏切まで津波から逃げた人々が駆け上がった。

④材木座付近 豆腐川から浸入した津波

豆腐川河口を襲った津波は旅館や人家を押し流し、海水は山裾まで達した。画面左の白く光った部分は、滑川から浸入した津波が東側低地に流れ込み滞留している。



モリソン屋敷



補陀洛寺

津波・海岸通りが最も激甚で、光明寺前は海嘯のためほとんど全滅。海嘯は新場の築堤（飯島辺り）を越え豆腐川に浸入し、民家を押し流し、岸壁を破壊。その浸水区域は補陀洛寺境内に達した。海嘯の高さは20尺（6m）以上であった。

- ・滑川に浸入した海嘯は、海岸橋を破壊流失せしめ、橋の上方低地より東方一帯の田畑に浸入したがその先端は勝田邸境（114番地、現材木座3-3、いずみ幼稚園付近）までおよんだ。
- ・最も被害が大きかったのは中島旅館（現コインパーキング）で破壊流出、海嘯は同館をめがけて襲来したかの如くこれを中心とした被害だった。

倒壊・滑川尻の埋立地は、住宅地として新しく開拓され、多くの別荘が建ち並んだが、殆んど倒壊した。この区域から東方材木座通に至る蔵屋敷（通称芝原と称する）一帯は、地質が軟弱な砂屑であり、且つ砂丘の上に建てられたものが多かったため、建物はほとんど倒壊した。

- ・伏見宮御別邸（下川原905番、秩父セメント鎌倉寮→現住宅地）は倒壊し、伊達侯、三井男等の別邸も大破した。
- ・九品寺、実相寺、千手院、向福寺、妙長寺、補陀洛寺はどれも全壊。光明寺は本堂、総門開山堂等の大建築は倒壊を免れた。

亀裂崩壊・海岸通は殆ど軒並み倒壊し、路面には大亀裂を生じ、貯水池付近では一時水を噴出した。
 ・五所神社は裏山の崖大崩壊して埋没破壊。・小坪トンネルは両入口の山崖崩れし、飯島道も崖大崩壊。
橋・海岸橋は墜落し、橋袂の民家二棟流出。

⑤長谷付近 中央三橋旅館付近焼跡

門前町をつくる長谷市街地は、火災でほぼ消失した。津波は稲瀬川から浸入し、海沿いの家々を破壊し、江ノ電軌道を越えて県道に達するほどであった。丘陵斜面にはがけ崩れが多発した。

津波・海嘯は稲瀬川より由比ガ浜電車停留場を越え県道付近まで浸入、坂の下においては県道北側の人家を浸した。

- ・海嘯は坂ノ下海岸のコンクリート岸壁を破壊し、方5、6尺重さ200貫以上もあると思われるコンクリート塊を5、6間も陸上に打ち上げた事実によってもその破壊力を想像することが出来る。



- ・海嘯は、稲瀬川二筋の流域に従って浸入し、電車軌道を越え、その東方は1304番地、北は由比ガ浜電車乗降場（現在の由比ヶ浜駅の長谷駅寄り）から1346番地先県道に達し、西方は234番地皆川邸より長谷電車停留場裏におよんだ。
- ・新宿方面は海岸の築堤を破壊してこれを越え、また稲瀬川口より新宿通りに従って浸入。長谷電車停留場より数10間の北方まで襲った。これによって由比ガ浜電車乗降場以南の海岸住宅20余戸は跡方なきまで破壊流出し、開業したばかりの旅館大正館（新宿84番地）は破壊。海水浴場の更衣場30余軒および漁船15艘流出した。

火災・火災は、長谷観音四つ角付近から東方は神明神社手前、西は観音前より北方大仏通り桑ガ谷入口から稲瀬川を越えて見越岳西麓に達し、同所より神明前に亘る一帯の区域を焦土と化した。

- ・当日は新調したガソリンポンプ到着し、放水試験のため、午前九時頃より各役員及び消防手事務所に集合し、機械の手入れ中であった。火災は長谷四つ角付近から発火、用水井戸にポンプを仕掛け放水したが、忽ち断水した。次いで諸戸邸（現長谷子ども会館とその周辺）の二つの池、大浦邸、皆川邸の池を利用し放水を継続した、神明前の延焼を防ぐべく、必死の活動をなしたおかげで、予想外小区域の焼失にとどむことが出来た。

倒壊・倒壊建物の最も多かったのは県道沿原の台より神明前に至る間および新宿で、就中電車長谷停留

場以南の新宿一帯はほとんど倒潰。原の台は道路上に倒壊して人々は屋上を歩く有様。被害の少なかつたのは、見越岳長楽寺山等の山裾と大谷方面。

- ・神明社は拝殿が倒壊。高德院は庫裡全壊、大仏は全体が1尺5寸南(前面)へ迂り出し、台座右後側3寸、前側1尺5寸地中にのめり込んだ。長谷寺本堂は傾斜、大観音像は倒壊を免れた、庫裡大黒堂阿弥陀堂念仏堂書院講中控所等全壊した。
- ・光則寺は倒壊は免れた。　・鎌倉病院は全壊。
- ・倒壊建物の主なるものは、三条、近衛両公爵、前田、佐々木両侯爵、大浦、内藤両子爵、内海、池田両男爵、中村是公等多くの別荘。

亀裂崩壊・県道三橋脇約30間に亘り亀裂を生じ、見越橋より大仏脇東に至る水路沿道はほとんど決壊。小谷口山林崖崩れ道路陥没、交通を阻止した。

- ・県道大仏坂は大仏門前の山崖崩落し、トンネルは深沢口が決壊して車馬の往来に支障を来したが、比較的軽微であった。
- ・見越岳は諸戸邸に面する斜面約1500坪、小谷口森村邸(長谷300 現長谷1-13)裏山は約千坪崩壊して大いに風致を損じ、光則寺内約300坪、桑ガ谷約500坪崩壊、大谷浅間祠裏その他諸所崩壊した。

橋・三橋及び見越橋は墜落し、稲瀬川橋は流出した。

坂ノ下

津波・海嘯は海岸の築堤を破壊し、これを越えて浸入し、その浸水区域は磯崎地区より東方長谷境に斜線を引きたる範囲である。その中心は旅館海月楼の辺りで付近に密集した人家は悉く破壊され、建物の残骸は波と共に県道北側の人家に押し寄せ、一部は此処に遺留されたが大部分は引く波と共に流出した。県道北側の人家はおおむね流失を免れたが、これは海岸寄りの密集建物によって波の威力が幾分遮られたためであろう。

- ・海嘯の引き去った後の海浜には、所々に亀裂を生じ水を噴出したが数日にして止まった。

倒壊・極楽寺坂寄の区域は、地盤が高いので海嘯に襲われなかったが殆んど軒並み倒壊し、電車線路と県道との間も被害激甚で、僅かに電車線路以北の区域が半壊程度であった。

亀裂崩壊・御霊神社は裏山の崩壊により土砂に圧され老松屋上倒れかかり、前面に大傾斜して破損少なくなかったが、幸いに倒壊を免れた。虚空蔵堂は山と共に前方に押し出されて埋没破壊し、堂の境内にあった坂ノ下公会堂も同じ運命に陥った。

- ・御霊神社前の電車トンネル上も崩壊し軌道を埋めたが被害は少なかった。
- ・極楽寺坂は北側崖より虚空蔵堂の山にかけて大崩壊をなし、県道は埋没し交通を遮断した。
- ・霊仙より稲村ヶ崎突端に至る山崖も大崩壊をなし、土石山脚の海を埋めて岬角まで徒渉に適することとなり、山上に幅5・6尺もある大亀裂を生じた。



手記(長谷 加藤庄吉氏)

新宿と坂ノ下の境の道路の西側に海月楼といふ旅館がありましたが家は何百坪という大きな立派な建物であったが、初めの津波では流されなかったのですが、二度目の大きな津波により道路の所まで流されてきたのです。

なお道路の北側になりますが、現在の稲瀬川保育園の所と御嶽大神の社の石垣の辺に材木が流れてきて山のようになっていました。又社内には津波が二尺位高く上った形跡がみられました。その東側に斉藤別荘の貸家が棟建っており、これも倒れ石垣も崩れ、そして流れてきた材木が山のように見えました。津波はやはり二尺ぐらい上ったと思われる形跡がありました。

⑥海濱ホテル

鎌倉市由比ガ浜（鎌倉町由比ガ浜）海岸は津波に襲われたが、砂丘上の鎌倉海濱ホテル（○）は津波の被害はうけなかった。しかし、大食堂は潰れ、死者を出した。松林に点在する海辺の大きな別荘も半壊、全壊の被害を受けた。

倒壊・当区（由比ヶ浜）

は、本町（鎌倉町）の中でも比較的新しく発展した土地であるから、建物も従って新しく且つ近代的粗造の建築が多く、宏大にして華奢な別荘建築も少なくなかった。加えて地質が砂屑かあるいは埋め立て地であったために、一層振動を強く感じたので、その被害もきわめて激甚であった。即ち六地蔵以西長谷境までの県道沿及び笹目通の一部を除いては、悉く全壊全焼の惨状を呈した。



即ち六地蔵以西長谷境までの県道沿及び笹目通の一部を除いては、悉く全壊全焼の惨状を呈した。

- ・一の鳥居、海岸通付近は広大な別荘が多かったが、そのほとんど全部が倒壊を免れなかった。山階宮御別邸（1234 番地、現東大鎌倉観測所）は倒壊した。松方公爵は一の鳥居別邸（大門 1037、現由比ガ浜 2-12 近辺）に滞在中であったが、邸宅倒潰。その他、島津公（現若宮ハイツ）、中山侯、陸奥伯、芳川伯、辻男、浅野総一郎、安田善二郎、井坂喬、林健、長銜郎、の貴顕紳士の邸宅も悉く倒潰。
- ・一の鳥居も倒壊破碎。
- ・海濱ホテル、鎌倉劇場は倒壊は免れた。
- ・笹目の鎌倉産科婦人科病院、島津侯、細川侯、松平子等の別荘は倒壊

亀裂・笹目通は亀裂を生じた。

関東大震災をみる (関東大震災 - 未公開空撮写真)

ジオ神奈川 蟹江由紀

関東大震災の痕跡，95年の歳月を経た今だからこそ，訪れていただきたい。

横須賀市港町公園 (横須賀市汐入2丁目) p. 47

標高30mの見晴山の急崖が長さ440mにわたり大崩壊した。崩壊土砂は16万 m^3 にも達し、通行人50人が犠牲となった。当時の新聞には、「小鳥のような女学生…横須賀海軍工廠に修学旅行で訪れた静岡の高等女学校生徒が犠牲に…」。

港町公園にある「大震災遭難者供養塔」には、建立者名が削られた遭難者名碑が目立たない所に置かれている。



遭難者名碑 (2015. 3. 12)

一段目と二段目に横須賀高等女学校(現神奈川県立横須賀大津高校)17名。三段目以下に一般の犠牲者名が刻まれている。横須賀高等女学校関係者が建立したらしい(蟹江, 2014)。

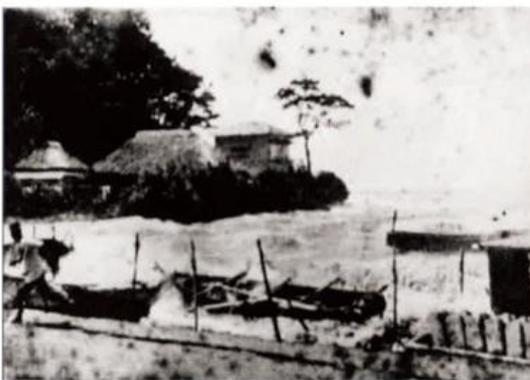
城ヶ島 (三浦市) p. 69

馬の背洞門は地震で1.8m隆起した。



鐙摺小浜 (現葉山町) p. 75

地震で30cm隆起したので、津波による人的被害はなかった。港の船溜が使えなくなり、1935年に竣工した。



日影茶屋で食事をしていた栄光学園の小山頼彦教諭が撮影。当時は要塞地帯の海岸線の写真は撮影禁止だったので、地震から33年後に逗子市に寄贈(逗子市立図書館)



船溜竣工記念碑 (2013. 8. 25)

震災遺構 (観音崎・相模川)

観音崎灯台の残骸 p. 59

残骸は、二代目の観音崎灯台。日本最初の西洋式燈台が1869年に点灯した。それから53年後、1922年の地震で亀裂が入り、二代目観音崎灯台を建立した。その5ヵ月後の大正関東地震に見舞われた。



観音崎 (2010. 1. 12)

旧相模川鉄橋の橋脚 p. 97

地震で墜落した旧相模川鉄橋の橋脚が、相模川に残されている。橋脚の残骸は、現東海道線の上り線と下り線の間に見ることができる。但し干潮時に。



左上り線，右下り線。平塚側から撮影 (2013. 3. 14)